

津田学園中学校 3年 寒河江 慶「五十年前の学生からの伝言」

私は三重県民ではありません。しかし、一日の大半を三重の風の中で過ごし、その空気を吸って、私は今、三重という時間に溶け込みながら成長しています。

私は岐阜で育ちました。地元では言葉のアクセントにそれほど特徴がなく、いわゆる「標準的な言葉」の中で生きてきました。そんな私にとって、中学校進学を機に三重県の学校へ通い始めたことは、大きな文化の衝撃でした。教室に入った瞬間、耳に飛び込んできたのは、それまで聞いたことのないような「～やで」「おもしろい」「～やねん」などでした。友達や先生が交わすその言葉は、ただの会話というわけではなく、どこか温かく相手に接しているような響きでした。

この衝撃をきっかけに三重県のことを調べてみると、誕生百五十周年を迎えるこの県は法的には「近畿」なのに経済的には「東海」とも深く結びついている。そんな三重県は、関西と東海の文化が絶妙に混ざり合う「文化の交差点」だということがわかりました。だからこそ、県外から来た私を当たり前のように受け入れてくれる、心の広さがあるんだと思います。最初は慣れなかった言葉の響きも今では私の毎日の学校生活に溶け込んでいます。

未来の三重県民の皆さんに五十年前、県境を越えて通学していた一人の学生は、この街の言葉に「優しさ」と「誇り」を感じました。これから時代が進んで、もしも言葉が全てシンプルに整理されたとしても、相手を思いやる広い心だけは、どうか絶やさずにいてほしいと思います。

住んでいるところが三重県じゃなくても、この街で学んで言葉を交わした時間は、私の人生の大切な経験になりました。二百周年の未来でも、この温かい言葉の響きが、さらに続いて広がっていくことを願っています。